

もうひとつの阪神タイガース

『阪神球団』『甲子園球場』全面協力！阪神タイガース承認本！

「球団」「球場」全面協力！

誰もが撮れなかった裏方の人々を
西の名手「妹尾豊孝」が撮る！



版型／頁…大型本・並製・160頁
税込価格…2520円

神戸新聞 デジタル情報部・後藤剛

グラウンドキーパー、打撃投手、トレーナー、ボールガール、場内アナウンサー、スタンドの清掃員…。阪神タイガースの本拠地でもある野球の聖地・甲子園球場で働く「裏方さん」たちに焦点を当てた写真集を、写真家の妹尾豊孝さん(68) 大阪府島本町 Ⅱ が出版した。

妹尾さんは1994年に日本写真協会新人賞を受賞。阪神・淡路大震災後の被災地を記録した写真集「神戸 西へ東へ」などで知られ、5冊の写真集がある。

小学校以来の熱烈な阪神ファン。いつもは選手たちに声援を送ってきたが、「彼らを支える人たちのことも知りたい」と、2006年7月から約2年間、球場に通った。

きっかけは自身が通う鍼灸師との雑談だった。「スコアボードの旗、だれが揚げてんの?」。阪神タイガースのトレーナーを務めたこともあるこの人の力添えて、球団から撮影許可を得た。

写真集には、タイガースを支えるさまざまな職種の人たちの、知られざる日常が写し込まれる。作品はすべてモノクロ。約7200カットから143点を選び出した。

正月の甲子園球場。しめ飾りのあるマウンドや整地のために掘り起こされ畑のようなグラウンド、ツルハシで作業するキーパーの姿などはめつたに見られない光景だ。

2軍本拠、阪神鳴尾浜球場のトレーナー室や選手寮の厨房は通常「立ち入り禁止」だが、特

別に入室が認められた。

打撃投手の撮影では、「息づかいの聞こえるところだ」と、広島や岡山のキャンプ地にまで「遠征」した。シーズン中のグラウンドでは追れない、くつろいだ打撃投手の表情が並ぶ。

「個人の写真家にはあり得ないチャンスだった」と妹尾さん。「不自然になるから」とストロボを一度も使わず、「近づいて撮る方がアリテイがある」と28mmと35mmの広角レンズにこだわった。ひたむきに仕事に打ち込む人々に、手の届く距離から迫っている。

球場に通ううちに、阪神電鉄の駅員や消防署員、警察官と被写体も広がった。撮影中に球場の改修工が進み、撤去前の名物のツタや内野スタンドの銀傘、照明塔なども姿をとどめる。



●妹尾豊孝(せのお・ゆたか)

1940年、岡山市生まれ。1959年、福岡県立田川中央高校卒業。1984年、大阪写真専門学校(現ビジュアルアート専門学校・大阪)卒業。写真集に「大阪環状線・海まわり」(93年)、「5,000,000歩の京都」(97年)、「神戸 西へ東へ」(01年、いずれもマリア書房)、「50年ぶりの炭都 筑豊田川の今」(05年、ブレンセンター)、「子どもの写真は、もう撮れない」(07年、ブレンセンター)、「もうひとつの阪神タイガース」(09年、ブレンセンター)がある。

1994年、日本写真協会新人賞、写真の会賞受賞。



北澤一朗撮影



子どもの写真はもう撮れない



50年ぶりの炭都

妹尾豊孝 写真集